

彼は夜空の下を歩いてた。立ちどまることなく、ひとり足早に歩いてた。黒ずくめの服を着て仮面をかぶった姿は、すっかり闇にとけこんでいる。

彼は弱者を食いものにする人間を許さなかった。誰にも知られず、誰にも見られず、誰の依頼も受けずに、蒸し暑いジャングルのようなこの街で、邪悪な者たちを追っていた。暗い空き地や裏道、暴力に満ちた路上を自在に歩き、目もくらむほどのビルの頂上や、じめついた地下道に煙のごとく出没した。

悪を見いだしたとき、彼は憤怒のかたまりとなって、稲妻のようにさばいた。

人々は彼をネメシスと呼ぶ。

ネメシスは、陽気な騒ぎ声や笑い声を避けて通った。だが、虐げられ救いを求める孤独な者たちの涙は見のがさなかった。そうして毎晩黒服に身を包み、顔を覆って、殺伐とした裏通りを歩いた。

それは正義感からだだった。正義の名のもとこそ、公平なさばきが可能になる。

影となって、彼は街を見おろしていた。

地方検事補デボラ・オロークもまた、足早に歩いてた。デボラはいつだって急ぎ足で、着実に自分の目標を達成してきた女性だった。いま、彼女はシンプルな靴をはき、アーバーナ市イーストエンドの荒れはてた歩道を歩いていた。このあたりは、魅力的な女性の夜

のひとり歩きにふさわしいとは言えない物騒な地域だが、彼女は恐怖を感じてはいなかった。むしろ意気揚々として、自分の車に向かってた。ある発砲事件の目撃者から情報を聞きだすことができたばかりなのだ。

早くオフィスに戻って、報告書を書かなくては。デボラはそのことばかりを考えていた。リコ・メンデス少年を殺した犯人たちに罪を償わせるのよ。運がよければ、わたしがその裁判を担当できるかもしれない。

先ほどまで崩れそうな古いビルの中にいたデボラは、おびえるふたりの少年を一時間にわたって根気よく説得し、やっと求めていた情報を手に入れたのだった。

通りは暗かった。街灯は二本を残してみんな壊れている。月さえも、ときおり雲間から顔をのぞかせるだけだ。狭い戸口には、酔っぱらいや麻薬の売人、売春婦たちが寄りかかるようにして立っている。わたしだって……とデボラは思った。姉さんの愛情がなかったら、どこかのうらぶれたビルのかたすみで人生を終えていたかもしれない。いまのわたしがあるのは、姉さんが親がわりになってわたしに教育を受けさせてくれたおかげだわ。

事件を起訴に持ちこむごとに、その借りを少しずつ返しているような気になる。

戸口に立っていた男のひとりが卑猥な言葉をデボラに投げつけ、女たちががさつな笑い声をあげた。相手にする必要などないわ。デボラがアーバーナに住むようになってまだ一年半にしかならないが、そのくらいのことにはわかってた。

角を曲がり、急ぎ足で自分の車に向かったとき、誰かが背後から抱きついてきた。

「いい女だね、ベイビー」

その男はデボラより二〇センチほど背が高く、いかついからだから、いやなおいを放っていた。酔っぱらいじゃないわ、とデボラは思った。アルコールならもつと動作が鈍くなるはずだもの。麻薬だ。目がどんよりと濁っている。

デボラは革のブリーフケースを両手で持ち、それで男のみぞおちを突いた。男がうめき声をあげ、手の力をゆるめた。その隙に身をふりほどき、必死に車の鍵を探した。

やっとポケットの中の鍵束を探りあてたとき、男に襟首をつかまれた。麻の布地が裂ける。うしろをふり返ると、男の手にナイフが握られていた。刃がきらりと光ったと思うと、顎のすぐ下にひやりとした感触が走った。

「捕まえたぜ」男はそう言って、くつくつと笑った。

デボラは身じろぎもせず、息をのんだ。男の目が邪悪な光をたたえている。やめて、と頼んでも通用する相手ではない。落ち着いて話しかけなくては。

「わたし、二五ドルしか持ってないわ」

男はナイフの先でデボラの喉もとをつつきながら、なれなれしく抱きついてきた。「いいやベイビー、あんたのからだには二五ドル以上の値打ちがあるよ」そう言うと、髪をぐいとわしづかみにして、悲鳴をあげるデボラを路地の暗がりにつっぱりこんだ。「好きな

だけわめくがいいさ」男が耳もとで言う。「おれはわめく女が好きなんだ。もつとわめけよ」ナイフの刃を喉に走らせる。「わめけ」

デボラはそのとおりにした。悲鳴は薄暗い通りに響き、ビルの谷間にこえました。あちこちの戸口からやじがとんだ。男を励ましているのだ。窓の明かりを消し、知らぬふりを決めこむ人々もいた。

デボラは壁にたたきつけられた。からだが麻痺したように動かない。頭もいつもなら鋭く冴えわたっているのに、いまはなにも考えられない。「お願い」無駄だと知りつつもつぶやく。「やめて」

男はにやりと笑った。「いま、気持ちのいいことをしてやるからよ」ナイフの先で、ブラウスの胸元のボタンをはねとばす。「すこく、いいことをな」

恐怖がデボラの五感をとぎすました。熱い涙が頬を伝うのがわかる。すえたような男の息と、路上にちらばった生ごみのおいが鼻をつく。男の目に、青ざめた自分自身の情けない姿が映っている。

わたしも犯罪の犠牲者になるのね——そんな思いが漠然と頭をよぎった。激増の一途をたどる犯罪の犠牲者に。

はじめはゆっくりと、次第に激しく怒りが燃えあがり、ついに恐怖の殻を破った。泣いてたまるものですか。おとなしく言うなりになったりしないわ。

固くどがったものを手に感じた。鍵束を握りしめていたことに気づいたデボラは、親指に意識を集中し、こわばった指のあいだに鍵の先をはさんだ。息を押し殺し、持てる力のすべてを腕にこめ、手をふりあげようとした。

そのときだった。男のからだがあいだに宙に浮き、両腕をふりまわしながら空を飛び、金屬製のごみ容器に激突したのだ。

逃げるのよ。デボラは自分の足にそう命令した。胸の鼓動がにわかに激しくなる。さつと車に逃げこみ、ドアをロックして、エンジンをかけよう。

だが、デボラは見たのだ——彼の姿を。

黒ずくめの服を着たすらりとした影が闇の中に立っていた。両脚を広げて構えたまま、麻薬中毒の男を見おろしている。

デボラは思わず一歩前に進み出た。

「さがつているんだ」ささやくような低い声だった。

「わたし……」

「いいから」彼はびしゃりと言った。デボラのほうを見ようとしぬい。

デボラがその口調にたじろいだとき、倒れていた男がはねおきて、うなり声をあげながらナイフをふりかざした。

彼が目にもとまらぬ速さで動く、ナイフの男は苦痛の叫びをあげ、ナイフが音をたて

て道路に落ちた。デボラはまばたきをする間もなかった。気がつく、彼は先ほどと同じ姿勢で立っていた。相手の男のほうは膝をついて、うめきながら腹を押さえている。

「すごいわ。わたし……」デボラは興奮したまま、なんとか言葉をつないだ。「警察を呼ばないと」

彼は依然としてデボラには目もくれず、ポケットからとり出したプラスチックの輪でナイフの男の両手両足を固定した。

彼はナイフを拾いあげ、ボタンを押した。刃がかすかな音をたてて中におさまった。それからやつとデボラのほうを見た。

頬の涙は乾いたらしいな、と彼は思った。呼吸はまだ荒いが、気絶したりパニックをおこす危険はなさそうだ。たいした度胸だ。

かなりの美人だ。象牙ぞうげのように白い肌、乱れてはいるが見事な漆黒の髪、やさしげで繊細な顔だち。だが、瞳には強い意志がみなぎっている——スリムなからだはまだ震えているけれど。

ジャケットが裂け、ブラウスの胸もとからアイズブルーのシルクのキャミソールがのぞいている。マニッシュなスーツとは対照的なランジェリーだ。

自分はなにをやっているんだろう、と彼はふと思った。ときめきを感じている暇などないはずだ。こんな気持ちに悩まされるよりは、ナイフをふりまわされているほうがましだ。

「怪我<sup>けが</sup>は？」彼は低く、抑揚のない声で尋ねた。

「たいしたことないわ」ほんとうは身も心も傷だらけだけれど、いまは気をしっかり持たないと、とデボラは思った。「ちよつと気が動転しただけ。なんてお礼を……」一歩近づくと、街灯の薄明かりのおかげで、彼が仮面をかぶっているのがわかった。デボラは大きく目を見ひらいた。

ブルーの瞳だ——鮮やかなエレクトリック・ブルー。彼はそう思った。

「ネメシス」デボラがつぶやく。「あなたのことは、誰かの豊かな想像力の産物だと思っ  
ていたわ」

「ぼくは実在の人物だ」ネメシスは生ごみにまみれてうめいている男に目を向けた。それから、デボラの喉に細い血の筋がついているのに気づいた。突然、わけもなく怒りがこみあげた。「ばかだよ、きみは」

「なんですつて」

「ここは掃きだめのようなところだ。きみが来るような場所じゃない。常識のある人間なら、よほどのことがないかぎり、こんなところに足を踏みいれたりはいらないよ」

デボラは懸命に怒りをこらえた。この人は自分を救ってくれたのだから。「ここに来たのは仕事のためだったのよ」

「まさか。レイプ殺人の犠牲者になりたいというのなら話はべつだが」

「そんなことを考えるわけがないでしょう？」感情がたかぶっていると、デボラの言葉にはかすかなジョーリア訛<sup>なまり</sup>が混じる。「自分の身は自分で守れるわ」

ネメシスはデボラのぼろぼろになったブラウスにちらりと目をやってから、再び彼女の顔を見つめて言った。「なるほどね」

デボラには彼の瞳の色がわからなかった。でも、たぶん濃い色だわ。くすんだ明かりの下では黒に見える。人を突きはなすような自信に満ちあふれた瞳。

「危ないところを助けてくださってありがとう。でも、べつに助けなど必要じゃなかったわ。あのウジ虫を自分の手でとちちめてやるつもりだったのよ」

「ほんとうかい？」

「ええ。目玉をくりぬいてやったわ」デボラは鍵束のとがったほうを突きだして見せた。

「これでね」  
ネメシスは彼女をまじまじと見つめ、ゆっくりとうなずいた。「きみならできただろう  
ね」

「あたりまえよ」

「ということは、ぼくは時間を浪費したわけだ」ネメシスはポケットから正方形の黒い布を出してナイフを包み、デボラに手わたした。「これが襲われたという証拠になる」

ナイフを手にしたとたん恐怖がよみがえり、デボラは懸命に動揺を隠した。「あなたに

は感謝するわ」

「ぼくは感謝を期待しているわけじゃない」

デボラははっと顔をあげた。わたしにこんな言葉を返してくるなんて。「じゃあ、なにを？」

ネメシスは彼女を見つめた。その瞳になにかが浮かんで消えた。デボラは背筋が冷たくなった。

「正義さ」

「だとしたら、こんなやり方は間違っているわ」

「これがぼくのやり方だ。きみは警察を呼ぶんじゃないのかい？」

「呼ぶわよ」デボラはそう言って、てのひらでこめかみを押した。ちよつとめまいがするし、胸もなんだかむかつかっている。こんな場所で覆面男と法や道徳について議論するものじゃないわ。いまはそんなことをしている場合でもない。「車に電話がついてるわ」

「じゃ、それを使うことだな」

「わかつてます」疲労のあまり、言い争う気力もない。かすかに身を震わせながら、デボラは路地を歩いていった。足もとに自分のブリーフケースが落ちていいる。それを拾いあげ、中に男のナイフを入れた。

五分後、警察への通報を終えて、デボラはさっきの場所に戻った。

「すぐにバトカーが来るわ」そう言って、けだるく髪をかきあげる。だが、彼はいなかかった。麻薬中毒のあの男が路上に転がっているだけだった。見ひらかれた目が獐猛な光をたたえている。ネメシスはこの男をほうりっぱなしにしたんだわ。わたしがまた襲われたらどうするの？「いるの？」眉をひそめ、通りを見まわす。

行ってしまった。

「どこに消えたのよ？」デボラは舌打ちをして、湿った壁に寄りかかった。まだ話は終わっていないわ。

ネメシスは彼女のすぐそばにいた。ただ、彼女にはその姿が見えないだけだった。

彼女にふれるのはやめよう、とネメシスは思った。そんな考えを起こすなんて、ぼくはどうかしている。ただ見つめるだけにしよう。美しい顔や、きめ細かい肌や、顎のあたりでゆるく内巻きになっているつややかな黒髪を記憶にとどめよう。

ロマンチックな男なら、彼女の姿を詩や歌にたとえるかもしれない。だが、ぼくにできるのは、彼女を見守ることだけだ。

闇を切り裂くサイレンの音が近づいてきた。見る間にデボラが平静をとり戻していくのがわかる。彼女は何度も深呼吸をして、破れたジャケットのボタンをとめた。それからブリーフケースをしっかりとつかんで、顎をあげ、自信に満ちた足どりで通りに向かって歩いていった。

現実と幻影のはざまに立つネメシスのもとに、ほのかにセクシーな香水の香りが届いた。  
この四年間ではじめて、彼は甘くせつない憧れを感じた。

(この続きは、MIRRA文庫『夜は甘き薫りを』でお楽しみください)